



| | |
|--------------|---|
| Title | 記録に見るリマの女性 |
| Author(s) | 吉田, 秀太郎 |
| Citation | Estudios Hispánicos. 1989, 14, p. 15-27 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/93790 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

記録に見るリマの女性

吉田秀太郎

はじめに

1987年の3月からちょうど1カ年にわたるリマでの生活は筆者にとって貴重な体験であった。仕事の関係上、ペルーの多くの文化人と接触することができたが、同時に古いものと新しいものが共存する美しいこの首都の人びとの生活ぶりも垣間見ることができたのは幸いだった。リマは、南の隣国チリのサンチャゴと共に、筆者の若い頃の思い出の地でもある。今から30数年前に見た旧市街の街並みはいまも当時の面影をとどめているが、古い建物で、時の重みに耐えかねて痛々しい様相を呈しているものもある。あの頃、通りに面する古いサン・マルコス大学の近くの古本屋でインカに関する興味深いタイトルの研究書を見つけたが買いそびれてしまったことが、いつまでも脳裏に焼きついている。このたびリマを訪れて、古い記憶をたどりながらさっそくそこに出かけてみたが、店の感じは変わっていた。小さな間口の、薄暗くてひっそりとした店内には客の数もまばらで、女主人が退屈そうに新聞をひろげていた。雑然とした露店の列の続くサン・マルティン広場界隈のいわゆる *barrio antiguo* には今も古本屋が沢山ある。実はその一軒でたまたま入手したリマに関する興味深い書籍が筆者にこの拙文を書かせる直接の動機となったわけである。1959年にリマ市議会が編纂した10巻からなるこの双書は、*Festival de Lima, Edición antológica* と題され、それぞれ短篇小説、詩、年代記、歴史、民俗、旅行記、芸術及び伝記、風刺及びユーモア、リマの女性、随筆が収められている。いずれもこの国の歴史の黎明期から編纂当時に至るまでを扱った作品から成っているが、読んでゆくうちに筆者はなぜか第4巻の「リマの女性」の魅力の虜になった。以下は、主として本書に依拠して述べたものであることを先

ずはじめに断っておきたい。とりわけ、時代的な区分については、リマの女性像を最も多くの人びとが描写し、論じてきた植民地時代の、いわゆる「古き良き時代」に限定しようと思う。

1. イメージとしてのリマ

歴史的に見て、リマはやはり古い都市という印象が強い。カリャオ港をその外港とするこの都市が、1535年、ピサロによって建設されたことは周知のことであるが、実はその前に、つまり1534年に、現在のフニン州のハウハにこの国の都が定められたことは余り知られていないようである。そこは山岳地帯にある盆地で土地も肥沃であるが、征服者にとって、海に近い方が安全性の上で好ましいと思えたため、間もなく現在の地に移されたのだと言われている。「両王の都市」と呼ばれていたリマは植民地時代の文化の中心地であった。1545年に設立された大司教区の権威は、かつて南米全域の教会に及んだことがある。一方、1551年には南米で初の大学が創立されたし、1584年には最初の印刷所が設けられた。こうした古い都のイメージは、とりわけアルマス広場を中心とした市街に残されている。しかしまた近代都市としての面目も主としてミラフローレス地区を中心として躍如たるものがある。この2つの地区はリマの2つの時代の象徴と言えるだろう。そのうちのどちらを無視しても、リマの実像を表すことは不可能である。リマは今や人口4百万を越す南米屈指の大都市である。そしてそこには地方から上京する人たちが跡を断たず、膨れ上がる人口問題は日毎に深刻の度を増しているといつてよいだろう。

2. 伝統的なリマの女性

さて、俗に十人十色と言われるように、人にはそれぞれ個性がある。従って、当然のことながら一集団の人間についてその特徴を僅かな言葉で表わすことには常に危険が伴うものである。とは言うものの、こうした個々の人間の違いを越えて、特定の歴史と文化の中で培われた集団にはそれなりのある共通した特性のあることも事実である。と同時に、そのような特徴も時代と共に変化してゆく運命にある。そしてこの微妙な変化に気づくのはその集団の構成員もさることながら、むしろ外部の人たちであることが多いように思われる。リマの歴史を通じて、多くの外国からの旅行者が

その印象を記していることがよい証拠と言えよう。『コンドルの復讐』などの短篇集で知られるベントゥーラ・ガルシア・カルデロンはこの国の作家だが、その生涯をほとんど海外で過ごした人である。それだけに自国のことを書くとき、かなりの距離を置いて眺めることができた人ではなかったろうか。

リマの女性に関する記述の歴史は古い。17世紀の文人カビエデスの文章はいまや古典的な存在となっている。彼はリマ生まれではなかったがリマに育ち、そこで生涯を送った人である。同時代の文人ペラルタと違い、金持ちの未亡人と結婚することはなかった。30歳のころに男やもめとなったが、生前の夫人に愛情あふれるすばらしい詩を書いている。生来快楽を好む人だったようで、マルティン・パストールによれば「…大のケベド好きで、大の遊び人で、大の酒豪だった」とあるから、相当に生活を楽しんだ人である。医者をも痛烈に風刺した『パルナソの歯』と題する詩で有名だが、女性についても鋭い観察者だった。彼によれば、当時のリマの女性は魅力を発揮する一つの手段として甘ったるい歯間音を用いたそうであるが、今日では残念ながら彼女たちから聞くことはできない。リマの女性の楽天的で社交的な性格に加えて、さきに挙げたガルシア・カルデロンの言によれば、その体つきについては面白い表現をしている。つまりトランペットを吹く天使のような、少し突き出した小さな口、アーモンドの一粒も入りかねそうな口、そして小さな足が彼女らの魅力のポイントだそうである。これはけだし彼だけの意見ではなく、多くの内外の詩人たちの詩行に同様なことが述べられているから、リマの女性の美しさの基準となっていたのではなかろうか。今でも、小説の中に足の大きな女性を登場させると、リマの女性はそんな風ではないと著者に投書がくるそうである。アルゼンチンの作家で『ラプラタからナイアガラへ』を書いたポール・グルーサックはリマを Ciudad-Mujer と呼んだが、リマの女性の魅力にたった2週間の滞在中に狂わされてしまったと述べている。

18世紀の文人たちの中で、コンコロールコルボのペン・ネームで知られるブスタマンテは『旅する盲人のための案内』の中で、リマの女性たちの化粧の仕方について詳述しているが、『顔をバラ色よりもジャスミンの色にするのが好きで、一般にバーミリオンを余り使わな』かったことを挙げている。植民地時代に婦人たちが昇承を用いて頬を染めていたことはフレ

ジールなどのすでに記すところであるが面白いのは若い女性たちの間で顔に米の粉を塗るだけの素朴な化粧が好まれ、恋人たちはそのつるつるした頬にうっとりとした、という件である。しかし19世紀の後半ともなると、女性たちはパリの流行に合わせておしゃれを楽しむようになる。ガルシア・カルデロンの文章にはリマの女性の姿をみごとに浮かび上がらせる力がある。

「お色気と神聖なものとを併せもって、カールした髪の下でキラリと輝く危険な目、くっきりと張り出した胸、低くて豊満で地中海を思わせる腰が、小さな足の上に不自然に乗っている——その足は考えられないほど小さくて、まるで掌にすっぽり納まるほどだ。」

ところで、植民地時代のリマの女性の風俗を最もよく代表しているものは、衣裳ではないだろうか。その時代の宮廷詩人マヌエル・デ・ロハスの詩に

彼女らの隠すものはすべて果実
彼女らの見せるものはすべて雪

というのがある。これは当時のリマの婦人たちが用いた裾の長い、ふくらんだスカート (saya) とマント (manto) を詠ったものである。上流社会の婦人たちのスカートが大てい紫色か鉛色を帯びた青色だったことはA・A・ボンナフェの絵を見れば明らかである。そしてマントは黒い上等の絹であった。それに美しいショールかスカーフと、手にしたロザリオ、絹の靴下、もうそれだけで聖者をも誘惑するのに十分だった。このような衣裳をまとった女性をリマでは通常タパーダと呼んでいた。つまり、マントで顔を覆った女という意味である。昔の回教徒たちのようなこうした服装は、教会に行ったり、お祭りのときに着たり、また散歩に出かけるときに用いたものである。コンコロールコルボはこの服装について、「この衣裳の起源は定かでないが、思うにこれは天使たちの絵姿をまねたものではないだろうか」と皮肉っている。この風習は19世紀の半ば頃まで続いたそうである。1851年、リマを訪れたチリの文人ラスタリアは、消え去りつゝあったペルー女性のこの衣裳を惜しんで一文を物している。「均勢のとれた髪が腰の辺から手入れの行き届いた足の甲と豪華な履き物まで垂れ下る官能的なスカート、前方に少し姿を見せる上等な絹のショール、かなり高価なブレス

レットをつけた裸わな美しい腕，そしてあの背中と顔に合わせるようにできていて片方の目だけしか見えないように顔の上で手で止めている黒い，まぶしいようなマント，それらは女性たちに神秘的で官能的で魅惑的な雰囲気添え，人びとを幻惑させる。これぞラ・タパーダの美しさであり，男性たちの五官と更に知性までも支配せずにはいない。このスカートとマントこそは，リマの女性がこの国の政治的，社会的運命に対して行使した力を完全に説明するものである。」

伝統的なリマ女性の衣裳は，さしずめ，わが国の女性の着物に相当するものであった。コンコロールコルボのこのような描写は，かつてスペインの文人グレゴリオ・マラニョンが自国の女性に関して述べた事柄をふと思い出させる。けだし封建時代は，男性は社会的に力を持ち，世界は一見男性によって支配されている感があるが，内実は，それらの男性も女性たちのある種の目に見えない糸によって，まるで操り人形のように巧に動かされていたのである。

ラスタリアの上述の文章を評してガルシア・カルデロンは，外面的なものが人間を決めるのではない，むしろ女性の魅力はその優雅さに秘密があり，それは容姿の美しさよりももっと美しい。リマの女性のよさは，ベニヒワのような陽気さと底抜けの楽天主義，そして異教的な人生の愛し方に求められるべきではなかろうかと述べている。これは極めて含蓄のある言葉と言うべきであろう。時代と共に衣裳は変わっても，リマの女性の性格は同じである。

ラ・タパーダの魅力については，それをあまりにも恐れたがために『女性の顔を覆う古今のヴェール，その結果と害』と題するエッセイを書いた人がいる。17世紀の法学者で，インディアス関係の法律の編纂に関する著作で知られるレオン＝ピネロがその人である。彼はリマの女性たちの「いたく手馴れた」目の動き (*jugar de ojos* 又は *visojea*) を批判して「われわれの言う覆面 (*taparse*) とはマントを折ったりねじったり止めたりして片方の目を覆いかくすことだが，それも決まって左目だけ見えるようにしている。そして顔の残りの部分はまるで全体が覆われているよりももっと隠させる，といった具合である…。女がニワトリのように目を分離し，一方を隠して他方を見せようとするのは，一方で正直者で恥ずかしがり屋であることを示し，他方では自由奔放で危険な存在であることを示すもの

であって、これは調和に欠けるものであり、同時に欠点である。」と強調している。こうした思慮深い忠告にもかかわらず、リマの女性たちはその恐るべき左目の効き目をなかなか捨て去ろうとはしなかったのだった。事実、こうした女性の服装が招いた笑えない話もいろいろとあったらしいのである。この服装は外見とは逆に、女性には自由を与えるものであり、女性にとっては大へん便利なものであった。それに反して男性、とりわけ既婚の男性にとっては不愉快の種となることがしばしばあった。そのわけは、いわゆる *galantería* という風習にあった。戯れに声をかけた女性が自分の妻であったという場合も少なくなかったらしい。そこで諺にも「リマは女の天国、男の煉国、ロバの地獄」と言われたのである。リマの女性たちがこの服装をこよなく愛したことは、『ペルー伝説集』にあるリカルド・パルマの「リマの女性たちの反乱」(*Motín de limeñas*) を読めばうなずける。マントとサヤに対する禁止令が17世紀の初頭、スペイン国王の名の下に下ろうとしたときの彼女らの抗議のものすごさに、遂にその命令は撤回されたのである。ちなみに、禁止の理由として挙げられていたのは、「高価で無駄で見た目によくなく、アンバランスで淫らで罪深い行いをしやすい」ということだった。

元来女性の貞節と男性の嫉妬に起源をもつと言われているこの衣裳が、全く逆の作用を行っているのは面白いことである。ちなみに、このマントも教会のミサのときはとったそうである。

マックス・ラディゲは、リマの女性たちについて記すとき、その若くてみずみずしい魅力にあふれる姿だけでなく、年老いた婦人の生き方にも注目している。それによると、若い頃の潑刺とした女性も、顔に皺が現れ、白いものが頭に見えるようになると、急に、まるで蚕のように家にこもり勝ちになる。そしてあらゆるものに無関心になり、死に対してさえもそうになってしまう。貧困に無関心なのは言うまでもない。若い頃の奔放な楽しみや家族との楽しかった日々をどうやって取り戻すべきか、そのすべを知らない。子供たちは外での生活が主であるため、大きくなっても自分の母をまるで役に立たない家具のように粗末に扱うのが常だ。「もしどこかの家で、たまたま訪問中の外国人が、老女が部屋に入ってくるのを見て席を立つと、若い女性がすました顔で『どうぞ、そのまま、こちらは私のママですから』と言うのを耳にするのは珍しくない。母親はこのような扱いを

苦々しく思ったりはしないのだ。習慣は第2の天性というではないか。彼女にとっての唯一の望みは、自分の娘が上品で、他人から賞讃され、男性に愛されることなのである。そんなわけで、彼女が娘に対して小さかったときに母親らしくしてやらなかった分を、女中のようにして奉仕することでつぐない、それに喜びを感じているのだ。」

これは一般家庭のことで、上流家庭ではこの限りではない、とラディゲは言うが、このような側面も、かつてはあったのかも知れない。しかし筆者の数少ない経験を通じてではあるが、幸いこのような事実に出くわしたことはなかった。

19世紀末から今世紀初頭にかけてのペルーの作家で外交官でもあったエンリケ・A・カリーリョはリマの新聞「エル・コメルシオ」に *Viendo pasar las cosas* と題するエッセイを連載したが、興味深いのは、リマの女性の一日の行動を最も典型的と思われるケースについて記していることである。その中で彼はリマの女性の少食ぶりを取り上げている。そのくせ甘い物には目がない (*la limeña pirra por las golosivas*) のは、日本の女性にも当てはまることではなかろうか。もっとも最近のわが国では肥満の危険を避けて糖分を控える傾向にあるのだが。もう一つは昼食時の老女の存在についてである。彼に言わせれば、これは一つの飾りである。いつ来たのか、そしていつ立ち去ったのかわからない存在である。老女たちの仕事はデリケートな事柄に関する使者の役割りを果たすことである。また彼女らは三聖誦 (*trisagio*) がどこにあるのか、祝いごとがどこであるのかを知っており、失せ物が現れるのを祈祷するためのサンタ・リータへの祈りの文句を書きとめた紙切れをいつも持っており、難産のときはカルメンの聖処女への祈りの文句、金持ちの恋人を手に入れるための聖エスペディトへの祈りの文句を心得ている。誰かが病気になれば、自家製の奇蹟的な効き目のある薬をあれこれと奨める。彼女らにとって、最も権威のある医者には決まって中国人である。ついでながら言えば、今日でもリマの旧市街には手広く経営している漢方薬の店があり、いつも客で賑っている。病人が今はのとき、彼女らは立派にこの世を去れるよう、あれこれと手助けをする。その病人が死んだとき、決して非難されるのが医者であり、そしてもし病気が治ったなら、それは彼女たちが捧げたノベナスの礼りと懸命な祈祷のおかげなのである。そのような種類の女性は大てい養老院などにおいて、リマ

でも最も立派な邸宅に平気で出入りし、昼食時には都での珍しい出来事や世間話を嘆息まじりに話し、少し仮定が飛躍し過ぎたようなときは「神様、お許し下さい！」と言い、淫らな話題が持ち上がったらしようものなら、「アベ・マリア・プリシマ！」となり、とがらせた乾いた唇で、まるで箴言でも口にするかのように、「ああ神様、何という世の中でしょう！」で結ぶのである。

そのような老女は、ある日突然、テーブルを離れるときのようにこの世を去ってゆくのだが、その余りのひそやかさのせいで、誰もそれに気づかないほどである。リマの女性はそんなとき「かわいそうにペティタおばちゃん！」と言うが、それが唯一の葬いの言葉であり、翌日からは昼食のとき一人分の用意が食卓から消えるだけである。

以上がカーリーヨの描く女性像である。リマの人びとの生活の一端を垣間見る気がするが、こんなにクールな女性たちばかりであろう筈はもちろんだらう。

ラ・ペリチョーリのこと

リマの一般的な女性像について述べてきたところで、この古きよき時代の女性のうち最もよく知られている人物の生きざまを紹介しておきたい。その人の名はラ・ペリチョーリ (La Perricholi) と言い、18世紀の半ばのペルーの都で人びとの話題を独占した。というのも、その美貌と才智によって時の副王の寵愛を得たまさにシンデレラだったからである。ルイス・アルベルト・サンチェス氏も言っているように、18世紀の後半は文芸サロンや哲学などの隆盛と相俟ってジャーナリズムや演劇、野外での生活やカフェの普及、そして同時に最も自由な愛が流行した時代だった。自由な愛といっても、これは神代の昔から世の東西を問わずあったわけだが、そしてペルーではピサロとインカの王女、ガルシラーソとパージャ・ドニャ・イサベルにおけるように征服の初期の時代から見られたものである。近くはフンボルトのような人でさえしばしば *echaba su cana al aire* ということで、学者カルダスの鬢鬢を買ったそうである。このようにして、リマの女性の愛には2通りの顔があった。つまり聖礼を必要とする公式の愛とそれを全く必要としないものである。

従って、かつてのフェリペ2世のストイックな精神に充ちていたマドリ

ードの宮廷でさえ風俗が自由化された当時のこと、副王たちや官吏たちが自由な愛に現を抜かしたとしても不思議ではなかったのである。

ラ・ペリチョーリと副王との愛は今や伝説となって人びとの空想の赴くままに限りなく誇張され、理想化されている。二人の愛をめぐる多くの文人が筆をとった。副王に対する非難の声は風刺詩となり、喜劇となり、政治的なキャンペーンとなって現われたが中でも「古参と新参の恥知らずのドラマ」(*Drama de los palanganas veterano y bisoño*)では副王のことを「金のロバ」と呼んだ。プロスペロ・メリメは1829年、『聖サクラメントの馬車』(*Le carrosse du Saint Sacrament*)を書き、同じくフランス人の航海者マックス・ラディゲは1842年、『イSPANOAアメリカ土産』(*Souvenirs de l'Amérique Espagnole*)の中でこの話を取り上げている。さらにソートン・ワイルダーも1928年、カミラ・ビジェガスを主人公に仕立てた小説『サン・ルイス・レイ橋』(*The Bridge of San Luis Rey*)を書いた。

虚像と実像

これほどまでに有名になったラ・ペリチョーリとはいかなる女性だったのだろうか。ラウル・ポラス・バレネチエアもすでに指摘しているように、彼女の生涯をめぐる伝説がさまざまな点で事実をぼかしている。かつて彼女の生地はワヌコだと言われていた。リカルド・パルマの断定によるものだったが、後に1928年になってアンドレス・エチェベリアが彼女の遺言を発見するに及んでリマの出身であることが明らかになった。ペルー百科事典によると、第31代副王マヌエル・デ・アマ・イ・フニエントとの愛で名を得た彼女の本名はミカエラ・ビジェガスと言い、1748年9月28日、アレキーパ出身の父ホセ・ビジェガスとリマ出身の母テレサ・ウルタード・デ・メンドサの娘としてリマに生まれた。幼少の頃から家計の負担を軽くするために劇場で働いていたという。彼女が舞台上で知られるに至ったのは、俳優ホセ・エスタシオや興業主バルトロメ・マッサとの親密さによることもあったが、それだけではなかった。生来の如才なさと魅力がなければあり得ないことであった。劇場では喜劇であれ、歌であれ踊りであれ実に器用にこなしたし、竖琴やギターも弾いた。彼女と同時代の人たちの文によると、ピカレスクな小唄を男性客のために歌い大好評であったらしい。ペリチョーリというのは彼女の渾名である。例のリカルド・パルマによれば、

この名前は副王が「Perra chola!」と呼んだことに由来する。副王はカタルーニャ出身者だったためにその地方のアクセントが残っていたことと歯が欠けていたことが重なって perri-choli となったのだという。ちなみに副王アマはペルーに赴任したとき(1761)すでに60歳に近かった(彼は1702年生まれ)。これに対してグスタボ・アドルフォ・オテロは別の説を立てている。すなわち、劇場で彼女を見初めた副王が思わず親しみのこもった pretixol という言葉を投げかけたのがその起りだというのである。「プレティチョール」と発音されたこの言葉は「私の宝物」の意味である。リカルド・パルマの説と比べてみてやはりこちらの方に説得力があるように思える。自分の愛する女性に、いくら身分が違ってもはいえ、あのような言葉を用いるとは考えにくいからである。副王アマがいつ彼女を愛しはじめたかについては、多分1766年のことだろうと言われている。赴任後5年目のことだとすれば、副王を60歳台の男とする記録は正確なものとなる。とすればラ・ペリチョーリが18歳のときだった。副王と彼女との間に1769年、男の子が生まれた。マヌエルという名がつけられた。(後にこのマヌエルとホセファ・デ・レオンの子がペルー独立の立役者として活躍することになる。)彼女は副王に家屋敷を提供してもらい、ウエボ通りに住んだ(1768年)。その他にも物質的な援助を得てラ・ペリチョーリは優雅で安定した日々を送ったが舞台生活は止めなかった。こんなエピソードがある。思い上がった彼女は興業主の顔を乗馬用の鞭でなぐりつけた。公演のリハーサルの途中で彼がわざとらしい反対の意見を言ったため我慢できなくなってつい手を出してしまったのである。侮辱された興業主の訴えにより副王は彼女の傲慢さをたしなめるため、2ヵ年間の長きにわたってその寵愛を拒んだが、遂にその厳格な処置も緩んで、1775年の11月から再び彼女は舞台に立つことになった。玉の輿に乗った女性の陥りやすい誘惑の穴であったと言えよう。副王は彼女をますます愛し、それまで2人だけのときしか用いなかったペリチョーリという愛称はいつしか人びとの間にも伝わっていった。厳格さで知られた軍人出身の副王も、40歳も歳下の、しかも魅力あふれる女性を愛人に持てば、彼女の絶大な力の下に無力になってしまうのも当然だろう。ラ・ペリチョーリは副王から贈られた馬車に乗ってアラメダ・デ・ロス・デスカルソスの通りを散策するのが好きだった。すっかり虚栄心を満足させた彼女はやがてその馬車をサン・ラサロ教会に寄贈した。当時ミ

ラフローレスやバランコ辺りは都心を離れた閑かな行楽地であったに違いない。彼女は馬に跨ってその辺までよく散歩に出かけたという。その颯爽とした姿はさぞかし衆人の注目を浴びたことであろう。副王がのどの喝きを訴えたとき、彼女は夜中にもかかわらず自ら水を汲みに宮殿からプラサ・マヨールの噴水まで出かけたこともあるという。副王アマは彼女との密会が分別のある上品な雰囲気の中で行えるよう、エル・プラドにあった礼拝堂と小劇場と広々とした庭園つきの別荘をラ・ペリチョーリに贈った。同じ植民地時代でも副王アマの赴任した18世紀の後半とそれ以前とではリマの風俗はずいぶん違っていて、以前は社会が宗教的な厳粛さの中にあったのに反し、今や人びとの意識の中に自由が芽生えてきた時代となっていたのだが、それでもこのように庶民出身の女性が正式に結婚することもなく、しかも堂々と上流社会の一員としてわが物顔に振舞う様を見て、自尊心の強いリマの貴族社会の婦人たちが苦々しい思いを禁じ得なかったことは容易に想像できる。彼女の生涯が多くの人びとに大いなる感銘を与えたとすれば、恐らくその生きざまが、当時ようやく台頭しはじめていた地方の小市民階級の向上心のみごとくに具体化するものであったためではないだろうか。副王はやがて1776年の7月、15年間のペルーでの生活の後、政界を退き、スペインに帰国した。リマに残したラ・ペリチョーリには、アラメダ通りの角に別荘と製粉所を贈ったが、その場所は今は某ビール会社の敷地となっているという。彼女は息子の養育のために舞台を去った。劇場の経営にも携ったが、それも1795年、ホセ・ビセンテ・エチャルリーという男と正式に結婚する少し前、手放した。晩年は財産管理と慈善事業に献身した。そして1819年5月16日静かに世を去った。

以上がラ・ペリチョーリに関する史実である。ついでながら、例のペルー百貨事典には彼女の肖像画が載っているが、バラの花飾をつけた黒髪が長く垂れ下り、均勢のとれた美しい三ヵ月眉、大きな目、ふくよかな顔立ちと豊かな胸元、それらが実に魅力的な女性である。副王は彼女のために現を抜かし、世人の非難を浴びることもあったが、まことに宜なるかなの感じがする。

ラ・ペリチョーリの生涯をめぐる物語りは時の経過と共に次第に伝説と化していった。歴史家ラウル・ポラス・バレネチェアによれば、まず彼女の出生地をめぐる、パルマがワヌコの生まれだと言ったことからワヌ

コはにわかに伝説の地として確固たるものとなった。ワヌコの山岳地帯の村トマイキチュアにはラ・ペリチョーリの生家と称する家が2・3軒あるという。この土地の人にとっては史実にもかかわらずここでなければならぬのである。ベントゥーラ・ガルシア・カルデロンもやはりワヌコをビジェーガスの生地とすることに固執している。伝説によれば副王はリマに来てすぐペリチョーリに恋をし、それ以後ペルーを去るまでの15年間、彼女と同棲したことになるが、彼女の生年が1748年と判明しているいま、2人が愛し合うようになったのは彼女が13歳のときだったことになる。ラ・ペリチョーリの伝説の中には、彼女が実は貴族の出身だったとするものもあるがそれを証明するものは何もない。

伝説によれば副王は彼女とロマンチックなひとときを過ごすためにすばらしい土地を選んだが、それはトマイキチュアの場合のように山際に位置し、夕暮れどきそこから海原と静かな平原が見渡せるところだった。これがキンタ・デ・プレサという別荘で、回教風とベルサイユ風を併せたすばらしい17世紀の建物だった。かってプレサ家とカリーリョ・デ・アルボルノス家のものであったが、伝説によればこれは副王の邸宅となっている。そしてその庭園にあった大理石でできた胸像はバックスを表していたが、これもラ・ペリチョーリのものということになった。ラ・プエルタ将軍の愛用した湯舟には彼のイニシアルが記されていたが、それもいつしか彼女の大切な家具の一つとなってしまった。エギグーレン、サンチェスその他の説によれば、ラ・ペリチョーリが晩年に住んでいたアラメダ通りの家は、実は密会のためのもので、本当の家はプラド修道院の背後にある別荘だったらしい。そこは現在はパン屋になっていて、副王の時代にはリンコンの家と呼ばれていた。

このようにしてラ・ペリチョーリの伝説は人びとの空想の赴くままにどこまでも広がってゆく。彼女の生きざまをノスタルジーを抱きながら想像するリマの現代っ子がいても不思議ではない。第31代副王マヌエル・デ・アマ・イ・フニエントは彼の残した闘牛場や、そこからデスカルス修道院に通じる遊歩道によってよりも喜劇女優ラ・ペリチョーリとの恋の物語によって長くペルーの人びとの記憶にとどまることだろう。それにも増して彼女は副王とのこの不思議な出会いによって、親しみのこもった古き良き時代の象徴としていつまでも語り継がれることであろう。

むすび

今日のリマの女性たちの生活は、世界の大都市の女性たちのそれとほとんど変わるところがない。都市は近代化され、女性の社会的進出は欧米先進国における場合と同様、目覚ましいものがある。筆者がリマに在住していた当時の内務大臣はたしか女性だったし、文部大臣もそうだったように記憶する。万事が機械化され画一化されてゆくこの都市の生活の中で、女性だけがその影響を蒙らずにいれる筈はない。しかし同時に、古き良きものが次第に失われてゆくようにも思われ、一抹の淋しさを禁じ得ないことも確かである。かつてスペイン人グレゴリオ・マラニョンは言った、女性が男性に伍して社会的な活動に従事するようになると、それだけ男性にとってはこれまで女性に対して感じていた魅力が薄らぐことになる、と。あれからすでに半世紀の歳月が経過した。その結果はどうであったか。要は各人の感じ方の問題である。ただ、人の常として、遠い過去へのほのかな憧憬のようなものが、いつの時代にもあるように思われる。そうした意味において、冒頭で紹介した選文案は、ペルーの遥かなる過去へのすばらしい案内人だと言えるだろう。

なお参考文献としては本文中で引用したもののほか、主として下記のものを用いた。

Enciclopedia Ilustrada del Perú (6 tomos), PEISA Ediciones, Lima 1987.

Festival de Lima (10 tomos), Concejo Provincial de Lima, 1959.

Historia general de los peruanos (tomo 2, El Perú virreinal), PEISA Ediciones, Lima 1986.

Palma, Ricardo; *Tradiciones peruanas* (tomo IV), Montemar y Simón Editores, Barcelona, 1896.

Sánchez, Luis Alberto; *Introducción crítica a la literatura peruana*, P.L. Villanueva Editor, Lima 1974.